

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.10 October 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

10

## CONTENTS

### ・巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その7  
／井上 昭洋 ..... 1

### ・英語文献にみる天理教 (18)

『Japan To-Day (現時の日本)』(5)  
／尾上 貴行 ..... 2

### ・天理図書館外史 (5)

天理図書館の文化的価値—文化資源活  
用の一つの取り組み②  
／三濱 靖和 ..... 3

### ・音のちから—中国古代の人と音楽 (34)

逸話を通して見る音の世界—大切な楽  
器の修理—  
／中 純子 ..... 4

### ・ブラジルの宗教的風景 (16)

アンテペラム期の米国系プロテスタン  
ト教会による布教活動⑩  
／中西 光一 ..... 5

### ・熊本地震と私—災害支援に学んだこと (2)

おやさまによって敷かれたレール  
／茶木谷 吉信 ..... 6

### ・2026 年度公開教学講座：布教伝道と伝 道学 (4)

第4講：異文化伝道論3—ブラジルか  
ら日本へ：在日ブラジル人の布教  
／中西 光一 ..... 7

### ・おやさと研究所ニュース ..... 8

2026 年度公開教学講座のご案内

## 巻頭言

## 「元初まりの話」の読まれ方・その7

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

「元初まりの話」では、うをとみに続いて、す紙幅はないが、「元の理」を理解するには、それぞれの方角から六つの水棲動物(しゃち・方位以外の視点も必要になってくるのではなかめ・うなぎ・かれい・くろぐつな・ふぐ)いか。

が月日両神に引き寄せられる。それぞれに神名が授けられ、二柱の雛型と六柱の道具が定まり、人間創造の準備が整う。一方、十人のつとめ人衆がかんろだいを囲んで勤めるかぐらづとめで、六柱の神名(道具)を勤めるつとめ人衆の立ち位置は、それぞれの道具(水棲動物)がもった方角になっている。神話と儀礼は相補関係にあるというのが神話学の定説だが、「元初まりの話」とかぐらづとめの間にも同様の関係が見いだせる。

天理教の信者であれば、つとめ人衆の配置図を一度は見たことがあるだろう。また、「十全の守護」の説き分けも知っているの、その両者を照らし合わせて、「元の理」をより深く胸に納めようとしているはずだ。しかし、「元初まりの六だい」の六柱、すなわち三つの対(父性・母性、男性性・女性性、夫・妻の対)はそれぞれ対極の位置に配せられるのに、残りの四柱、すなわち「十全の守護」の説き分けで対となっている二柱——くもよみのみこと(東)とかしこねのみこと(坤)、たいしよく天のみこと(艮)とをふとのべのみこと(西)——は相対していない。かんろだいを中心とする同心円上、それぞれの方位に配せられる神名すべてが、対極の神名と対になっていけばすっきりするのに、と思ったことはないだろうか。

道具衆の意味を考える時、方位は確かに重要な手がかりであり、相対する二つの神名(道具)の間に強い関係性が想定される。先に示した四柱の二対は方位上対峙していなかったが、逆に対峙する二対——くもよみのみこと(東)とをふとのべのみこと(西)、たいしよく天のみこと(艮)とかしこねのみこと(坤)——は、「十全の守護」の説き分けでは対峙性が明示的でなく、個別の読みが必要となってくる。ここではその読みについて詳細に記

こうした方位だけでは解けない部分に、別の角度から光を当てたのが、教外の研究者として「元初まりの話」を最も体系的に読み解いて見せた蔵内数太である。彼の「元の理」研究は多岐にわたるが、中でも示唆に富んでいるのが六柱の道具衆についての解釈である。彼はまず、方位に基づく対極性と異なる切り口として、六柱の道具衆を東側の女神三柱(ふぐ・うなぎ・かめ)と西側の男神三柱(しゃち・くろぐつな・かれい)に分ける。さらに個々の道具の性質を分析した上で、前者は生命の個性性を意味し、求心的・統合的側面があるとし、後者は他者との関係性を意味し、遠心的・展開的側面を持つとする。

彼はさらに「層位」という視点を導入して、六柱の道具衆の意味を考察し、東西の女神・男神の各三柱が三つの層に分かれて、そこに三種の対応関係があることを示す。すなわち、太く分厚いもの(ふぐ・しゃち)は植物的層に属し、細長いもの(うなぎ・くろぐつな)は動物層に、平たいもの(かめ・かれい)は人間的層に属するというのだ。この層位の視点により、それぞれの道具は対極の方位にある神名(道具)だけでなく、同じ層位にある神名との関係性において解釈されることになるが、詳細な解説は次回に譲りたい。

### 〔註〕

(1) 十柱の神名のうち残る四柱もそれぞれの方角(北・南、中南・中北)を占めるが、その方角の解釈については立ち入らない。

(2) 蔵内数太  
(1979)『泥海古記』について：中山みきの人間学』赤心社。

(1986)『G-TEN』第14号「特集：蔵内『元の理』学」。

(1988)『『元の理』と世界思想—特に易との関連から』『G-TEN』第26号、49～67頁。『講座「元の理」の世界2：「元の理」の象徴学』に再録)

## 『Japan To-Day (現時の日本)』 (5)

おやさと研究所准教授  
尾上 貴行 Takayuki Onoue

ここまで、1910年にロンドンで開催された日英博覧会を契機として、望月小太郎が外国人に日本を紹介するために刊行した英文書籍『Japan To-Day (現時の日本)』についてみてきた。同書の内容は日本の歴史と現状の概説であるが、そのなかで、立教からわずか70数年の天理教が特筆すべき宗教の一つとして紹介されている点はきわめて興味深い。望月が天理教を取り上げた経緯は明らかではないものの、同書への掲載は当時の日本社会における天理教の存在感を示す一つの証左であったといえよう。

この書籍は天理教教会本部に寄贈されている。『みちのとも』明治43年(1910)7月5日号掲載の「英文『現時の日本』と天理教」(77～78頁)でそのことが紹介されている。当時は船場教会(現・船場大教会)の布教師がロンドンへ渡航し、布教活動を行っていた時期でもあり、同号にはそのロンドン布教に関する記事が掲載されていた。そのため、「英文『現時の日本』と天理教」記事は、ロンドン布教に加えて「モーター本教を世界に紹介された嬉しい事実を読者諸君の前に報道するの光栄を有する」と書き起こされている。

同記事ではまず、ロンドンで開催されている日英博覧会が日本政府と英国の博覧会会社の共催であること、そしてこの機会に前衆議院議員・望月小太郎が経営する東京の英文通信社が、日本の現状を広く世界に紹介する目的で、多額の資本と学識を投入して『Japan To-Day (現時の日本)』を編集・刊行したことを紹介している。さらに、同書が「売価一冊金拾五圓」で販売されていることも伝えている。

続いて、寄贈された同書の装丁について、次のように記している。

先づ驚かされたのは其表紙の立派な事と非常に厚みと重みのある事とである。表紙は京都西陣製の織物で古代式に日本の景色が織出されて、大通を太い絹の組紐で綴っている紙数は全巻で八百余頁だが、極く上等の西洋式が用ひてあるから、厚み約四寸位はあらうと思はれる。大きな鉄瓶を下げた時程の重みがあって二歳や三歳の子にはとても持つこない。

さらに本文についても、

巻を開くと非常に鮮明な英文の間々に極めて精巧な写真版が無数にいれてあるから、文字の読めない人でも、此写真だけ見て置けば、日本の概要だけは解る。記事の順序は最初に日本の歴史の大体が、それから物産、工業、官制等、台湾、樺太、満州の事迄互細流暢な英語ですらすらと書き下ろしている。

と紹介し、豊富な写真と平易な英文によって、日本の概要を外国人に理解させる構成になっていると評価している。

一方で、日本の文芸に関する記述が見当たらないことに物足りなさを感じつつも、宗教については比較的詳しく扱われていると指摘。仏教では高野山(真言宗)や総持寺(曹洞宗)をはじめとする名刹が紹介され、神道では伊勢の大廟とともに「我が天理教」が掲載されていると述べている。そして、天理教に関する記述について、次のように紹介している。

同書六百九十九頁を披くと Tenrikyo 天理教と云ふ見出しがあつて初めに総論めいた事を少しく述べそれから教祖の御履歴を書き、九十歳の長寿を保つて御帰幽になったが、その後信者は非常に増加した。今日迄には種々の迫害もあつたけれども、政府は遂に一昨年十一月二十七日独立の宗教たる事を認可したと云ふ事から、天理唱歌の幾部分及び御守護、八埃等の事などが述べてある。それで写真版は祭服を召して御座る管長公を最初に本部、中学校、教祖御墓地、加ふるに土持ちの處迄載せてあるから先づまづ此記事によつて本教の大要が知られる訳である。(写真参照。上の教会本部、下の土持ちのきしん。)



さらにこの記事は、『Japan To-Day (現時の日本)』の価値について、「大隈、山縣、桂其他朝野の名士から寄せられた賞賛状によつても明らかに知る事が出来る」と述べている。そのうえで、同書は10万部印刷され、そのうち3,000部は諸外国の国王や大統領などの要人へ寄贈され、残部は主として日英博覧会の来場者に頒布される予定であると紹介。そして最後に、「かくして日本の事情が諸外国に紹介せらるるのは嬉しいが、我等はそれと同時に本教の幾分が、廣く萬国の人々に知らるるのかと思ふと無限の喜びを感じずには居られない。」と結び、同書を通じて天理教が世界へ紹介されることへの期待と喜びを表明している。

『Japan To-Day (現時の日本)』でのこの天理教紹介については、後年、大久保昭教『外国人の見た天理教』(天理教道友社、1973年)でも取り上げられている。大久保は、明治42年(1909)2月に『大阪朝日新聞』が連載した「天理教独立奉告祭」の記事はそれまで新聞や雑誌でさまざまな批判や攻撃を受けてきた天理教にとって画期的な意義をもつものであった、と分析している。また、この独立奉告祭を日本国内で刊行される英語をはじめとする外国語出版物において天理教が取り上げられるようになった契機として位置づけ、その具体例の一つとして翌年刊行の『Japan To-Day (現時の日本)』を挙げている。そして、「明治43年ロンドンの日英博覧会記念出版物『現代日本』の中で紹介された記事は、きわめて大きい影響を与えたと申せよう」(137頁)と述べているのである。

大正7年の天理教青年会発足時に、その会の目的を達成するための実行項目の一つとして、なぜ図書館の設立を掲げたのだろうか。この時期、日本国内では図書館の設立が相次いだ。明治期に創立した図書館は、387館だったが、大正期には、3,244館が創立する。その6割以上に当たる1,966館が、大正14年設立の天理図書館と同時期の大正11年から大正15年に集中して創立されている<sup>(1)</sup>。こうした社会的背景も一因となった可能性はある。しかし、天理教青年会が図書館設立を掲げた背景を考えるうえで、教団内部における学問観の変化に注目する必要がある。

深谷徳郎初代館長は、「青年会の創立以前から、本教に図書館が必要であることは、教内の有識者の間では既に十分に認められており、当然必要であることも認められていた結果だ」と述べている<sup>(2)</sup>。しかし、明治期、とりわけ、教祖の御在世当時のおやしきには、学問を修めた人々が多数集っていたわけではなかった。松村吉太郎の明治19年の逸話によると、「多少学問の素養などもあった松村の目には、当時、お屋敷へ寄り集う人々の中に見受けられる無学さや、余りにも粗野な振舞などが、異様に思われ、軽侮の念すら感じていた」という。そうした折、教祖から、「この道は、智恵学問の道やない。来る者に来なと言わん。来ぬ者に、無理に来いと言わんのや。」とのお言葉を承って、「松村は、心の底から高慢のさんげをし、ぢばの理の尊さを、心に深く感銘した」とある<sup>(3)</sup>。

この逸話は、松村を通して人間の高慢心を戒められたものであるが、明治20年に教祖が姿を隠した後もしばらくの間は、学問を排斥する風潮があった<sup>(4)</sup>。そうした風潮が、少しずつ変化する。天理教は、教派神道一派である神道本局に属していたものの、明治政府の方針とは合わない教えを説いていたので、政府から弾圧を受けていた。とりわけ、明治29(1896)年には内務省訓令によって、激しく弾圧をされることになり、世間からもいわれのない誹謗中傷が続く。そうした中、独立した宗教団体としての公認を得るために、明治32年には天理教校、続いて、明治41年には天理中学校という教育機関を設置する。また、大正期になると東京の大学で学ぶ教内の学生も現れ、大正4年には、天理教本部青年会が「将来おぢばに図書館を設立する準備に着手中」であり、「寄贈図書歓迎」を呼びかけている<sup>(5)</sup>。大正5年以降になると、東京大学をはじめとする大学で学問をおさめた若い人たちが教団本部に帰ってくる。大正6年に本部青年会顧問に就任した松村吉太郎は、彼らに対して、「誠と信念を以て主とし、学問智識を以て従とせねばならぬ」と戒めた上で、「今日の状態に鑑みれば、決して学問智識を閑却することならぬ。誠と信念を以て天啓の教を信受して、これを活用するには、学問智識も大いにその必要がある<sup>(6)</sup>」と説いている。こうした動きの中で、図書館設立の構想は、大正7年の青年会規程において、青年会の目的を達成するための正式な実行項目として明文化された。

その図書館は、大正14(1925)年に海外布教を目指す人材を養成することを目的として創立した天理外国語学校(現天理大学)の中に「天理図書館」という名称で実現する。その後、地域社会の人達にも公開する図書館を新たに建築することにな

る。これが、本館(現在の西館)である。本館の建築は、公開図書館によって社会貢献を果たすという理念が結実したもので、その後も公開図書館であり続けることによってその理念を象徴する建物となっている。

本館の建築は、昭和3(1928)年5月30日、創設者中山正善天理教2代真柱が、きりしたん研究で知られる恩師の姉崎正治に相談するところから始まる。この計画に関して、2代真柱が姉崎に対して率直に物を言える信頼関係があったことを表す逸話が残っている。当時、姉崎は新築した東京大学図書館の館長だったが、その図書館について数多くの不満を漏らしていた。まだ学生だった2代真柱が東大の問題点をできるだけ改めて図書館をつくりたい、と持ちかけたところ、姉崎は「俺の図書館には欠点は一つもない」と答えたという<sup>(7)</sup>。

実際には、姉崎の助言でミネソタ州立大学図書館の建築プランの一つを元にして、京都帝国大学附属図書館長の新村出や東京帝国大学工学博士内田祥三の意見を聞くなど何度も改訂をしながら、最終的には、内田の紹介により京都帝国大学工学部坂静夫に設計を依頼し、昭和4年から工事が始まり、翌5年に竣工した。

外観を概略すると、地階部分の外壁には黄竜山石、1階と2階にはスクラッチタイルを使用している。2階の窓は半円アーチを用いたロマネスク風の意匠、正面玄関の階段にはフランク・ロイド風の花鉢が取り付けられている。内装には、講堂の椅子、閲覧室の机、ホールのシャンデリア、大理石のカウンターといった調度品がある。これらのものは今でも使用している。こうした例は、現役の図書館としては稀有であり、文化的価値を高く評価されている。

ところで、シャンデリア、大理石のカウンター、壁の飾り付けの意匠などの内装は、意図的に豪華にしたわけではない。むしろ、2代真柱は、「余計な所へ不必要に手が込んで華美に過ぎると思われる欠点もないではない」と述べている<sup>(8)</sup>。豪華な内装になったのは、契約締結後の物価下落により、当初の契約額のまま工事が進められたためである。物価の高かったときのままで支払いをすることを決めたため、工事業者の仕事が契約外のことも施工するほど丁寧になり、豪華な仕上がりになったのである。

建物について述べてきたが、2代真柱が考えていた図書館の中身つまり蔵書はどのようなものだったのだろうか。

[註]

- (1) 文部省社会教育局『全国図書館二関スル調査—昭和11年4月現在』、3頁。
- (2) 深谷徳郎「天理図書館の経過と将来の方針」『道乃友』大正15年12月5日号。
- (3) 『稿本天理教教祖伝逸話篇』190「この道は」。
- (4) 堀越儀郎「文書伝道の教外的価値」『道乃友』大正14年2月5日号。
- (5) 『道乃友』大正4年8月号、87頁。
- (6) 天理教青年会本部『天理教青年会史』第2巻(1975年)、313～317頁。
- (7) 「創立の日をかえりみて」『ビブリア』第18号、6頁。
- (8) 「天理図書館二十五周年の回顧と将来を語る」『ビブリア』第5号、8頁。

## 逸話を通して見る音の世界—大切な楽器の修理—

天理大学国際学部教授

中 純子 Junko Naka

名器にはしばしば名が付けられる。本邦には藤原貞敏（807～867）が唐の廉承武から与えられた琵琶に「玄象」や「青山」と名づけられた品があった。「玄象」「牧馬」「獅子丸」などの名を持つ楽器の説話が集められた『名器秘抄』（南北朝期の編纂）という書もある。中原香苗氏によると、「音楽説話のうち、楽器名物に関するものは、かなり組織的な形で『江談抄』にみられる。……楽器名物譚は、音楽説話の中でも特に人々の関心を集めていたものと想像される」（『宮内庁書陵部蔵『名器秘抄』考』『論集 説話と説話集』2001年、和泉書院所収）とある。『江談抄』とは平安後期の説話集で、珍重される楽器に名が付けられることは、我が国では当然のことだったようである。中国でも、古代から特別な七絃琴に「璵璠之乐」と銘として刻まれたり、「鳳凰」と名が付けられた話は漢代の『西京雜記』（『太平広記』巻203所収）にみられる。では、藤原貞敏が訪れた唐代において、特別な楽器に名が付けられた逸話をみてみよう。

## 命名された楽器

唐代の逸話を集めて宋代に編まれた錢易『南部新書』巻9に、「忽雷」と命名された琵琶について以下の記述がある。

韓晉公が朝廷に勤めていたおり、使命を受けて蜀に行くことになり、長安の西南の駱谷に到ると、山椒の巨木が美しく生い茂り、鳥や鳥の鳴き声もみな他とは異なっていた。馬からおりて、柘の弓で射ようとすると、てっぺんの梢が落下して、山間に響き、それは鐘や磬のような音色があった。任務を終えて都へ戻る折に県の役人に命じて樵を募ってこれを伐採させ、その幹を取って馬に載せて都に戻った。そして良匠を召してこれを切らせたが、その名は分らなかった。堅くてきめが細かいことは紫石のようであり、金色の線がその間に雑じっていた。匠は琵琶の胴に使えば、他の木で作るものとは比べものにならない仕上がりとなるでしょう、と言った。そこで二張りの琵琶ができた。大きいほうを大忽雷、小さいほうを小忽雷といった。別殿で徳宗が音楽について語られることがあり、それで大忽雷を献上し、宮中に所蔵された。小忽雷は親仁里にある。（韓晉公在朝、奉使入蜀、至駱谷、山椒巨樹聳茂可愛、鳥鳥之声皆異。下馬以柘弓射其巔杪、柯墜於下、響震山谷、有金石之韻。使還戒縣尹募樵夫伐之、取其幹載以歸。召良匠斲之、亦不知其名、堅緻如紫石、有金色綫交結其間。匠曰為胡琴槽、他木不可並。遂為二琴。名大者曰大忽雷、小者曰小忽雷。因便殿德皇言樂、遂獻大忽雷、為禁中所有。小忽雷在親仁里）

「大忽雷」「小忽雷」の琵琶を作った韓晉公（韓滉）は、代宗から徳宗（779～805）にいたる時期の人である（『歴代名画記』巻10参照）。最後に徳皇とあるのは、徳宗である。前回紹介した康崑崙と段善本の琵琶の勝負をさせたのも徳宗であった。徳宗の時代は、玄宗の側近だった宋璟の孫の宋沆が『樂書』三巻を献上したり、節度使から「南詔奉聖樂」など楽曲の献上が相次いで行われたりした。音楽を政治的にも活用し、音楽によるパフォーマンスの重要性を理解していた皇帝であるといえよう。「大忽雷」は、この徳宗に献上されたものであった。そして、その命名は、山椒の巨木の梢がてっぺんから落ちてきた音が、山間に響いたためであろうか。また、「小忽雷」のほうも、その後、宮中で使われていったことが以下の逸話にみられる。

## 宮中楽器の修理

こうした名器は修理を繰り返して微調整されることにより良い音を保つものである。宮廷音楽機関の太常寺や宴饗音楽を掌る教坊に技術をもった楽人たちが集まっていた長安では、崇仁坊という宮城の近くの区画に楽器修理工場が集まっていた。以下のような逸話が、晩唐の段安節の『楽府雜錄』「琵琶」の条にある。

文宗朝に、女官に鄭中丞というものが出て、琵琶が上手であった。内庫には、琵琶が二張りあり、それぞれ大忽雷、小忽雷と呼ばれていた。鄭中丞はいつも小忽雷を弾いていたが、頸部が抜けてしまったので、崇仁坊の南の趙家に琵琶を送って修理させた。だいたい、楽器職人はすべてこの崇仁坊におり、なかでも二趙家は一番優れていた。（文宗朝、有内人鄭中丞、善胡琴。内庫有二琵琶、号大・小忽雷。鄭嘗彈小忽雷、偶以匙頭脱、送崇仁坊南趙家修理。大約造樂器悉在此坊、其中二趙家最妙）

文宗の御代は826年から840年までの間である。藤原貞敏が、遣唐使准判官となり唐へ渡ったのが838年（日本：承和5年）であり、当時中国では楽器制作の技術水準がかなり高く、一張り一張りの楽器に個々の性格や謂われがあり、特別な装飾が施されていたりしたのであろう。

ちなみに、この『楽府雜錄』の琵琶の条では、「内人鄭中丞善胡琴」という言葉がみえる。そのあとすぐに「内庫有二琵琶、号大・小忽雷」とあることから、「琵琶」が「胡琴」とも称されていたことが確かめられる。またこれは宋初に編まれた百科事典的な書物『太平御覽』巻583楽部の「琵琶」にもみえる。「胡琴」の名称は、中唐以降に定着していったといえる。

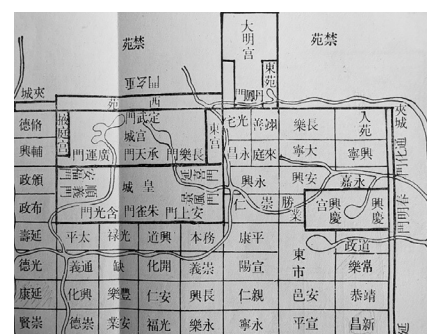
さて、「大忽雷」が献上されたのは徳宗の御代であり、徳宗から文宗の間、短くても20年の間、宮中にて「小忽雷」もともに使われていたことは確かであり、頸部が脱けてしまったため崇仁坊の修理場へ預けられた。しかも腕のいい修理工である南の「趙家」のところへであった。

## 楽器制作・修理の崇仁坊

徐松『唐兩京城坊攷』

（愛宕元訳注 平凡社東洋文庫）の図（右）

では、大明宮の南の第四区画に「崇仁」とみえる。ここは皇城にも近く、朱雀門付近に位置する宮廷音楽機関太常寺からも近い。また、



興慶宮にも近い。つまり、宮中音楽を演奏する場からの距離が近く、楽器の修理場として好立地といえよう。さらに『唐兩京城坊攷』には、「崇仁坊」の条に、玄宗の娘の太華公主、徳宗の娘の義陽公主の邸宅があったことが記載されている。こうした邸宅では華やかな宴会が行われたことであろう。また、ここには韓晉公の邸宅もあったとのこと。「大忽雷」「小忽雷」を作らせた本人もここに住んでいたのである。さらには、長安の妓女が集められていたのは、崇仁坊のすぐ南の「平康坊」であった。楽器の制作や修理は、宮廷も民間も同じ坊で行われた。崇仁坊は宮廷音楽と民間音楽が交差する場所でもあったのだ。

ジェームズ・クーリー・フレッチャーは、妻ヘンリエットと息子エドモンドとともに、1852年2月14日にリオデジャネイロに到着した。その後、フレッチャーは、当時の駐ブラジル特命全権公使であったロバート・カミング・シェンク (Robert Cumming Schenck) の庇護の下、アメリカ人のための牧会活動に従事した。その間、彼は公使から「アタッシュ (attaché)」、すなわち専門調査員としての命も受けた。そして、フレッチャーの活動は次第に宗教活動の範疇を超え、外交関係の仕事にも携わるようになり、後には公使館書記官や代理公使を務めるなど、重要なポストに就くまでになった。

この点で、先にみたダニエル・パリッシュ・キダーとフレッチャーの活動は、かなり対照的であるようにみえるが、ともにブラジルのプロテスタント化を目指していた点は共通しており、その対象とした層が異なっていたにすぎない。前者が主としてカトリック教会の影響下にあった市井の人々を対象としたのに対し、フレッチャーは、ブラジル帝国の知識人や政治家といったエリート層を主な対象としていた。

#### フレッチャーの活動展開と米伯関係への関与

ブラジル宗教史を専門とするブルーノ・ゴンサウヴェス・ホージによると、当初フレッチャーは、牧会活動のみに従事するという前提のもとでブラジルへ渡った。しかし、シェンクとの出会いを契機として、自身を取り巻く状況が変化するなかで次第に考えを改め、牧会活動に限定せず、ブラジル人への福音宣教も重要な任務であると自覚するようになった<sup>(1)</sup>。事実、フレッチャーの心情の変化は、父カルヴィンに送った手紙にも明確に示されており、そこには、ブラジルのプロテスタント化に向けた彼の画策や、その難題に向き合おうとする強い意志が記されている<sup>(2)</sup>。彼は、ブラジルのプロテスタント化は単なる改宗にとどまるものではなく、それが国の経済的、科学的、技術的な「進歩」にもつながると思っていた。そのため、同じく「文明化」を訴えたキダーとは、共通の認識を有していたのである。

1852年から1853年にかけて、フレッチャーは、プロテスタントに寛容でリベラルな傾向をもつ知識人や政治家との交流を積極的に行い、次第に彼らの信望を集めていった。彼は、こうした人々を「進歩の友人であるブラジル人」と称し、可能な限りカトリック教会の方針に抵触しないように自身の考えを訴えるとともに、さまざまな利害を調整できる政策についても模索した。こうした活動を続けるなかで、1852年9月、皇帝ドン・ペドロ2世がカリフォルニアへ向かう途中でリオデジャネイロ港に寄港していたアメリカの蒸気船シティ・オブ・ピッツバーグ号を見物することになり、フレッチャーがその案内役を務めた。これが、彼と皇帝との最初の出会であったといわれている。

皇帝は蒸気船を見て回り、その機能を詳細に分析し、精巧なメカニズムに驚嘆したといわれている。フレッチャーは皇帝に付き添い、英語、フランス語、ポルトガル語を駆使して、皇帝とアメリカ人士官との間の仲立ちを行った。事実、この出来事

は *Brazil and the Brazilians* (1857) に記されており、フレッチャーは次のように記録している<sup>(3)</sup>。

ブラジル滞在中、私は、たびたび気づかされることがあった。アメリカについてブラジルで広まっていた認識不足、そしてブラジルについてアメリカ国民の間に広まっていた、それと同様の認識不足である。そこで私は、一個人の力の及ぶ限り、誤った印象を取り除き、両国の間により良い相互理解をもたらしたいと願った。

皇帝との出会いを機に、フレッチャーは、両国にはびこる互いの「認識不足」に気づき、「相互理解」という言葉を用いて両国の関係をより緊密にする必要性を抱くようになった。1853年から1854年にかけて、彼は妻の健康問題のためにアメリカへ一時帰国するが、その間、すでに帰国していたシェンクの協力を得て、ミラード・フィルモア大統領と会い、ブラジルとの良好な関係を構築する必要性を説いた。しかし、やがて彼は、ブラジルがすでにアメリカによる地政学的戦略の渦中にあることを、不運にも思い知らされることになった。

#### モーリーによる「ブラジル・アマゾン開発構想」とその影響

この時期、首都ワシントンでは、アメリカ海軍士官であり、海洋学者、天文学者、地質学者、歴史家など、多彩な経歴を持つマシュー・フォンテーン・モーリー (Matthew Fontaine Maury) による「ブラジル・アマゾン開発構想」が進められていた<sup>(4)</sup>。彼は、1850年代を通じて「アマゾン川流域の国際開放」と、それに伴うアメリカ南部の黒人奴隷を用いた当地の植民計画を強く提唱・画策していた。こうした動きの背景には、当時のアメリカで奴隷制の廃止をめぐる北部諸州と南部諸州が対立していたことがある。そこでモーリーは、両者の対立を緩和するため、アマゾン地域を南部の「安全弁 (safety valve)」とみなし、奴隷主と黒人奴隷を当地に移して大規模プランテーションを築く構想を練っていた。

ちなみに、アメリカ南部を起点として奴隷制を国外へ拡大しようとする発想は、アンテベラム期の地政学的戦略においてもたびたび取り上げられていた。とりわけ、南部から地理的に近いキューバの占領・併合は、アマゾン地域への進出以上に活発に構想されていた。このモーリーの構想はフレッチャーに大きな衝撃を与えるとともに、ブラジルとアメリカの良好な関係構築を阻む障壁として立ち現れたのである。

#### 〔註〕

- (1) Bruno Gonçalves Rosi. "James Cooley Fletcher, o missionário amigo do Brasil". In: *Almanack*. Guarulhos, n.05, 1º semestre de 2013, p. 65.
- (2) Ibid., p. 65.
- (3) Daniel Parish Kidder and James Cooley Fletcher. *Brazil and the Brazilians: Portrayed in Historical and Descriptive Sketches*. Philadelphia: Childs & Peterson, 1857, pp. 237-238.
- (4) Rosi, op.cit., p. 66.

# おやさまによって敷かれたレール

## 共時性について

去る7月28日、マグニチュード7の地震が熊本を襲いました。前回（2026年8月号）に10年前の熊本地震を題材にした1回目の原稿を書き、拙文が関係各所に回っている最中に、今回の地震が起きたのです。この偶然に驚かれた方も多いのではないのでしょうか。

共時性という言葉があります。シンクロニシティともいい、元々は心理学の用語です。たまたま相手のことを考えていたとき、その相手からLINEが届く、といった不思議な現象を指します。この連載を始めることも、もともと予定されていたわけではありません。ひょうたんから駒が出たように決まったものです。

こういう「タイミングの奇跡」は、特に災害の現場ではよく起こります。10年前の地震のときに起きた「タイミングの奇跡」も、今後の連載でいくつかご紹介する予定でした。それに加えて今回のこの「奇跡」は、いったい何を意味するのでしょうか。

ひとつ確かに言えることは、今回の地震で得た新たな知見や、逆に10年前から少しも進歩していないと感じる分野などを、これから書き加えることになるということです。私はここに、親神様の思召しがあり、親神様から与えられた御用であると強く感じました。今回2回目を書くにあたり、一言申し添えておきます。

## 私は何をすべきなのか

お話を10年前の地震に戻します。

本震の当日、詰所に到着するや否や荷物をまとめ、教養掛も無理を言って代わっていただき、帰途につきました。一刻も早く帰り着くため、軽自動車で高速道を走ることにしました。

前震から2日経っていたこともあり、詰所には支援物資がすでに届いていました。それを軽自動車に積み込むだけ積み込みました。前震の夜からまともに眠っておらず、フェリーでも夜中にたたき起こされています。そこからさらに12時間の運転です。さすがに不安に思っていたところへ、名古屋の友人から電話がかかってきました。奇特にも運転を申し出てくれたので、その言葉に甘えることにしました。

ところが、運転を代わってくれたのはいいのですが、軽自動車でも夜間、猛スピードを出して飛ばします。別の意味で、3日目も眠ることができませんでした。

帰り道の助手席で、私はいろいろ考えていました。

「私は何をすべきなのか」

あまりに漠然とした問いに、明確な答えなど出てきませんでした。

そのときでした。携帯電話が鳴りました。着信表示は、かつて布教部の御用でお世話になった、関東のある大教会長（当時）でした。こんな夜になんのご用かと、恐る恐る電話に出ました。「あ、茶木谷さん、お久しぶり。今ね、近所のホームセンターで水と食料を買えるだけ買って、トラックで熊本に運んでもらっているから。到着したら全部あなたに任すので、後はよろしくね」

「え？ なんで私なんですか」

「だって、熊本に知り合いはあなたしかいないもの。じゃあ、よろしくね」

4トントラック2台で熊本を目指しているとのこと。すでに1台は九州に入っているということです。

熊本に知り合いが私しかいないというのは、嘘だと思います。顔の広い有名な先生でしたから、多少の知り合いはおられたはずです。この瞬間から、2週間にわたる地震支援の毎日が始まるこ

とになりました。いや、感覚的には「巻き込まれた」というほうが正しいでしょう。まさに、ご存命のおやさまによって敷かれたレールでした。

自教会に到着したのは夜中でした。すぐにPCを立ち上げ、ニュースサイトやSNSで情報を集めました。まだ情報は錯綜しており、県庁のホームページにも正確な情報が十分に出ていない状態でした。

メールやSNSを通じて、安否を気遣うメッセージもたくさん届いていました。物資の支援や支援金の申し出もいただいていた。物資はある。拠点を探し、そこから被災者に配布しなければならない。そのくらいのことは想像できました。

このとき脳裏に浮かんだのが、「支援に必要な情報を集めて公開し、参考にしていただきながら、有用な情報のリンクも共有できるサイトを作る」ということでした。

しかし、一から作っていたのでは間に合いません。そこで、当時個人的に利用していたFacebookを活用することにしました。

Webの世界はとにかく広く、一個人が情報を発信しただけでは、発見すらしてもらえません。そこでFacebookの広告機能を利用し、新たなページを立ち上げて広告に出しました。費用は1週間で2万円くらいだったと記憶しています。

ページ名にはずいぶん悩みました。しかし、怒られるのを覚悟で「天理教熊本地震支援情報センター」と大げさな名前を付けました。ここは認知度が最優先だと思い、怒られたら名前を変更すればいい、と割り切ったのです。

支援を必要とする人は何万人もいます。そして、支援したい人もたくさんいます。この両者をうまくつなげなければ、助かる人も助からない。そういう思いでした。

なぜFacebookだったのか。もう一つ重大な理由があります。それは、写真を撮ってアップするだけで、時系列に記録が残ることでした。記憶は嘘をつきますが、記録は嘘をつきません。キーボードを叩いている暇などなく、写真を撮ってアップするだけで精いっぱい毎日になることを予想していました。

このページは現在も残っています。見てみると、最初の投稿は本震から24時間も経っていない、帰り着いた日の深夜に県の情報をアップしたものでした。初期の投稿を読み返すと、手探りで何かを発信しようとしている様子が伝わってきます。そして、ろくに寝ていなかったこともタイムスタンプからうかがえます。

何をすればいいのかわからなかった私の行動が、関東の大教会長によって決定づけられたこと。そして、情報を共有する手段を構築できたこと。この二つが、のちに大きな結果をもたらすのです。



2016年熊本地震発生直後の被災地の様子（筆者撮影）

## 第4講：異文化伝道論 3—ブラジルから日本へ：在日ブラジル人の布教 中西 光一 Mitsukazu Nakanishi

はじめに

本講座では、天理教のブラジル伝道の歴史を踏まえつつ、日本におけるブラジル人の布教活動に着目し、異文化伝道の実態と布教伝道のあり方について考察した。従来、ブラジル伝道に関する関心は、主として当地における天理教の歴史的展開や発展過程、布教伝道の実践に向けられてきた。しかし、ブラジルで生まれ育ち、日本とは異なる社会的・文化的背景をもつ信者が日本へ渡り、布教活動を行う事例については、十分に検討されてこなかった。そこで筆者は、日本に在住する4名のブラジル人に焦点を当て、日本とブラジルにおける宗教文化や社会的背景の違いから、彼らの布教伝道の実践にどのような特徴が読み取れるのかを明らかにした。

#### ブラジル伝道の歴史とトランスナショナルな信仰継承

まず、ブラジル伝道の歴史を概観した。戦前には、教祖40年祭に向けた「教勢倍加運動」の下、天理教南海大教会などによる「集団移住型」の海外布教が展開された。天理教は日系人社会への布教を中心に発展し、とりわけ大竹忠治郎によってブラジル伝道の礎が築かれた。戦後は、昭和26（1951）年のブラジル伝道庁の設立を機に日伯の教会間の連携が強化され、その後、天理教の土着化や異人種間結婚を背景として非日系人信者が増加した。また、「おぢばがえり」やブラジル人子弟による「おぢば」の学校への進学などを通じて日伯の信者間の絆が深まり、国境を越えた信仰継承が進展した。

こうしたブラジル人の動きを理解する上で、筆者はトランスナショナリズムという視点を念頭に置いて考察を進めた。トランスナショナリズムとは、国民国家の枠組みや国境を越えて、人々が複数の国家にまたがる社会的・文化的・宗教的なネットワークを形成・維持する現象を指す。ブラジル人の場合、日本での長期滞在の形態として、①天理教校・天理教語学院・天理高等学校・天理大学への進学、②天理教海外部での勤務、③自教会における青年づとめや女子青年づとめ、④布教の家への入寮、⑤教会関係者との婚姻（教会長・布教所長配偶者など）、⑥出稼ぎ就労が挙げられる。こうしたトランスナショナルな経験は、日伯の教会間の紐帯を強化するだけでなく、新たな異文化伝道の実践を考える上でも重要な意味をもつ。

#### インタビュー調査から読み解く異文化伝道の実態

そうした観点から、筆者は2026年4月から7月にかけて、奈良県ならびに岡山県に在住する4名のブラジル人インフォーマントを対象に、それぞれ2時間程度の半構造化インタビューと質問紙調査を実施した。調査対象者は70代女性から20代・30代の男性まで幅広く、いずれも日系人であり、教内学校の在学生や教会本部従事者など、それぞれ異なる経験を有している。そのため、あらかじめ断っておくと、本講座では彼らの経験を単一の「異文化伝道モデル」として一般化するのではなく、その個別性を重視しながら日本とブラジルにおける宗教文化や社会的背景の違いを検討し、以下の3点を示した。

第1に、日本とブラジルにおける宗教文化の違いが、布教伝道のあり方や人々の教えの受け止め方に大きな影響を及ぼすことが示された。ブラジルでは、カトリック文化が生活のさまざま

な場面に浸透しており、多くの人々が幼少期から宗教行事に携わっているため、神や宗教について語ることへの心理的抵抗が比較的小さい。一方、日本では宗教について直接語ることが容易ではなく、まず相手との信頼関係を築き、その上で教えを伝えるという段階的な実践が重要になるとの指摘があった。また、天理教が日本発祥の宗教であることは、日本人への布教において理解を得やすい側面をもつ一方、ブラジルでは日本的な要素の強さがかえって不安や戸惑いにつながる場合もあるという指摘もあった。これは、教えの普遍性を前提としながらも、それぞれの文化や価値観に応じた柔軟な布教伝道の実践が必要であることを示している。

第2に、「布教伝道」を単なる教勢拡大の手段として捉えるのではなく、「おたすけ」の実践として位置づける視点の重要性が確認された。特に、異国の地における戸別訪問は、宗教文化や価値観の違いも相俟ってブラジル人に心理的な不安を与える。しかし、それを、さまざまな困難を抱える人々や孤立する人々に寄り添う「おたすけ」の実践として捉え直すことで、自身の意識や行動が変化する点が示された。また、ブラジル人が日本で直面する不安、とりわけ言葉の壁は、かつて日本からブラジルへ渡った先人たちの苦労を少しでも理解する契機となり、異文化伝道の難しさを痛感することにつながるとの指摘もあった。

第3に、日本社会のニーズに応じた布教伝道を展開する必要性が指摘された。例えば、少子高齢化や子どもの貧困問題に伴い、子ども食堂の運営や中高年の交流活動など、地域社会との接点を広げる社会貢献活動が重要である。また、信者数の減少により、家族内での信仰継承や若者から若者への伝道、少年会から学生会へとつながる継続的な人材育成も重要な課題となっている。これらはいずれも、異文化伝道において現地の社会・宗教情勢を考慮した上で示された見解であるが、とりわけ在日外国人労働者の問題については、日本社会への不適応や孤独感を抱える外国人に寄り添い、支援する布教伝道の実践についても言及された。これは、同じ外国人としての経験を共有しているからこそ、異文化適応や異文化理解の難しさを理解できるといった観点から示された見解である。

#### おわりに

以上を踏まえると、宗教文化や社会的背景の違いは教えの受け止め方や伝道方法に大きな影響を与えることから、「おたすけ」の精神に基づき、相手の文化や価値観に寄り添った柔軟な布教実践が求められる。特に、異国の地での布教伝道に伴う心理的な不安も、「おたすけ」の実践として捉え直すことで、布教師自身の意識や行動を変える契機となり得る。また、少子高齢化や信者数の減少、在日外国人労働者の孤立といった日本社会の現状に即し、地域社会との接点を広げながら支援の輪を広げていくことも、今後の伝道には欠かせない視点である。この日本とブラジルを往来する中で培われた信仰や布教経験は、教えを伝える側であるブラジル人自身が、異文化との接触を通じて新たな伝道の可能性を見いだしていく過程でもある。こうした経験を糧に、異文化理解と柔軟な対応力を備えたグローバル人材の育成こそが、今後の天理教の発展を支える重要な鍵となるであろう。

# 2026 年度おやさと研究所 公開教学講座 「布教伝道と伝道学」

|      |           |                              |              |
|------|-----------|------------------------------|--------------|
| 第1回  | 4月25日(土)  | 伝道学入門—丸川仁夫『伝道学概論』から考える       | 堀内みどり 主任(終了) |
| 第2回  | 5月25日(月)  | 異文化伝道論1—イスラームの宣教活動に学ぶ        | 澤井 真 研究員(終了) |
| 第3回  | 6月25日(木)  | 異文化伝道論2—コンゴでの伝道とその課題         | 森 洋明 研究員(終了) |
| 第4回  | 7月25日(土)  | 異文化伝道論3—ブラジルから日本へ：在日ブラジル人の布教 | 中西光一 研究員(終了) |
| 第5回  | 9月25日(金)  | 伝道史の探究1—明治時代における教会設置         | 澤井治郎 研究員     |
| 第6回  | 10月25日(日) | 伝道史の探究2—戦前・戦中の北米伝道           | 尾上貴行 研究員     |
| 第7回  | 11月25日(水) | 伝道史の探究3—『天理教伝道者に関する調査』を読む    | 岡田正彦 研究員     |
| 第8回  | 12月25日(金) | 伝道学の展開1—天理大学史の中の「宗教学科」       | 島田勝巳 研究員     |
| 第9回  | 1月25日(月)  | 伝道学の展開2—時代の動きと道の「時句」         | 金子 昭 研究員     |
| 第10回 | 2月25日(木)  | 伝道学の展開3—帝国時代とポスト帝国時代の海外布教戦略  | 井上昭洋 所長      |

日時：毎月25日 13:00～15:00

会場：天理大学研究棟3階 第1会議室

事前申し込みは不要です。  
直接会場にお越しください。

※但し、第10回(2月)はふるさと会館大ホール(九号棟)

グローバル天理

第27巻 第10号 (通巻322号)

2026年(令和8年)10月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

おやさと研究所 (HP)



印刷 天理時報社

Printed in Japan